



菊田さん（中央）、日系人会会長のノボルさん（右端）他、ヘスス・モンタネ大学の皆さん

米プロジェクト～成果と課題について

米づくり支援担当

菊田 仁（新潟／CUBAPON 会員）

私は 2009 年からクバポンの米づくり支援担当を担い、キューバ・青年の島で取り組みを進めてきました。

2015 年 6 月 1 日からキューバの青年の島に 1 か月滞在し米づくりの支援活動をしてきました。長期滞在は 2014 年の 6 か月滞在に引き続き 2 度目です。今年度は 11 月に 1 か月滞在することになっています。

キューバの米づくりは日本と異なり、気象の違いに加え、耕地の整備の遅れ、機械装備の不備、燃料費の高価格、肥料・農薬等の資材不足等の悪条件の中、生産が続けられています。とりわけ、青年の島は米づくりの経験が少なく、機械整備が進んでいません。また、2012 年に許可された日本大使館による「草の根無償支援協力事業」による田植え機等の機械導入もキューバ政府の許可の遅れのため、6 月中には導入されていませんでした。また、支援地区 4 か所中 2 か所だけしか稲の作付けされていませんでした。1 地区はポンプの故障で水が確保できなかったこと、1 地区は耕耘する機械が確保できなかったこととのことです。また、作付けされた 2 地区も直播のため芽の出が悪いところがありました。

私たちの稲作支援の目的は田植え等による稲作の安定生産を行い、キューバ・青年の島での米の自給率を高めていくことです。

いま、収穫の秋

青年の島「米プロジェクト」



メヤ地区の田んぼ。品種は「セレクション 1」と「LP5」



フカロの原田さんの田んぼ。水溜りのところは芽が生えない。適期に作業できればこのようなことは避けられるかもしれない。機械の導入が待たれる。



シロ・レドンドの田んぼ。牛で耕起し、「LP5」を播く

6 月の滞在では見るべき成果はあまりなかったものの、改善点が幾つか見られました。それは、① 2 地区で田植えによる栽培をする計画を立てたこと。これは前年 9 月に稲作研究施設へ

の視察研修を行い、田植えの方が安定生産できることを学んだ結果です。また、② 滞在期間中に島の政府の役人から「島で、米の生産で賄える見通しが立った。日本の支援のお蔭だ」と感謝され、少しずつでも長く支援を続けてきた成果だと思います。③ 「草の根無償支援協力事業」による機械の導入の目途が立ったことです。次回行くときまでに機械が稼働していることが期待できます。

11 月のキューバ・青年の島での 3 度目の長期滞在では、2 地区で実施された田植えによる稲作栽培の収穫を確認したいと思いますし、「草の根無償支援協力事業」による機械が導入されたら、田植えを中心とした機械作業の確立を図りたいと思います。

最後にクバポンの稲作支援活動にご支援していただいていることに感謝申し上げます。



カリブの風 「カリビアンブリーズ」に酔いしれる

キューバ第一次独立戦争開始記念日である10月10日、川越南文化会館（ジョイフルホール）において、「キューバ★ラテンフェスティバル～大高寛&オルケスタ・カリビアンブリーズ ライブコンサート」が開催され、会場に詰めかけた約250名がラテン音楽を堪能しました。

主催者を代表し CUBAPON 君島一宇代表委員のあいさつでフェスティバルがスタートしました。

幕が上がると目に飛び込んできたのは、ずらりと並んだアーティスト群、管楽器が放つ光、女性コーラスの原色の衣裳。日本のラテン音楽をけん引してきた「東京キューバンボーイズ」のバンドマスターだった大高寛さん率いる「オルケスタ・カリビアンブリーズ」の世界に一瞬で引き込まれました。



コンサートでは、ソン、ルンバ、マンボ、ボレロ、チャチャチャと、世界を魅了してやまないキューバ音楽が余すところなく披露されました。

日本のマンボの“名曲”「お祭りマンボ」では会場に手拍子が響き、ステージと客席が一つになりました。

すばらしい演奏を聴かせてくれた「オルケスタ・カリビアンブリーズ」の皆さん、フェスティバルの企画・運営にご尽力いただいたスタッフの皆さんに心から感謝します。

尚、フェスティバルを録画したビデオを編集し、後日、頒布する予定です。ご協力をお願いします。

「オルケスタ・カリビアンブリーズ」リーダー
大高 寛さんより

ごあいさつ

この度、私共が大好きな国＝キューバに長年にわたりボランティア活動が続けておられる「CUBAPON」より「キューバ★ラテン・フェスティバル」に是非出演を、とご依頼を受け、喜んで参加させて頂く運びとなりました。

私共オルケスタ・カリビアンブリーズは、キューバ音楽に魅せられ、お陰さまで20年を超える活動をして参りました。音楽が生活の一部となっているキューバ国民の楽しみ方の雰囲気、少しでも再現できたらと思っています。どうぞご来場の皆様方も私たちグループと一緒に、キューバ音楽を思う存分堪能頂ければ幸いと存じます。

ご来場、まことに有難うございました。



青年の島に「友好の宮殿」を！

カンパのご報告

フェスティバルの会場カンパ及び物販収益149,749円を「友好の宮殿」建設資金に加えることとします。



完成予定図

『島のヨシコさん』と楽しいひととき

上河ヨシコさんを囲む会
in 坂戸

9月27日、坂戸駅前集会施設にて、キューバの青年の島で暮らす“キューバ移民一世”『上河ヨシコさんを囲む会』が催されました。

ふるさと日本へ11年ぶりに帰国、現在、地元である大阪の介護施設で働いているヨシコさん。いつもハツラツ、元気いっぱいの姿と大阪弁の軽妙な語りで、キューバで暮らしているからこそ、今の日本に思うこと感じたことを織り交ぜつつ、短い時間ながら参加者の皆さんとの懇談が行われました。

続いて、若葉駅前の「カッピングロード」に場所を移し、楽しく交流しました。



ヨシコさん（左から4番目）を囲んで

キューバをおもって

上河よし子

今年3月、11年ぶりにキューバの島から日本に帰って来ました。

来てから3日目、知人とアベノで待ち合わせ。ケイタイも時計も持っていなかった私は、キューバではどこでも誰にでも尋ねられる「今、何時ですか？」という言葉が誰にも言えず、とまどった。

たくさんの人……。なのに、みんな何やら急いでいて、表情は硬く、他人をよせつけない。キューバのように、ゆったりとにこやかに歩いている人がいない。私は、たくさんの人の中で、ひとりになったようで涙が出てきた。キューバで味わったことのない孤独。

電車に乗ると、一人ひとり、話すことなくケイタイに向かって下を向く。子どもたちも、さわぐことがない。

キューバの暑い満員バスの中。熱気ムンムン。となりの人たちと大声で話し、ワーワーさわぐ子どもたちを懐かしく思う。

一つひとつのアパートの部屋。家々。近所の人たちが家の外で話しこんだり、楽しんでいるのを見ない。シーンとしている。

キューバではどこでも、窓越しに、通りごしに大声で話し、にぎやか。個々で生きるなど想像さえできない。キューバで暮らしているキューバ人には、日本の社会は想像もできないことだろう。

キューバにはコミュニティがあるという。そうだ、と思う。

私はキューバで、連れ合いのエドと畑を耕し、豚を育て、馬車で魚をとりにいったり原野で動物や自分たちの食べ物を捜しに行く。

単調な毎日。でも、道行くたくさんの人とあいさつを交わし、その日の米や砂糖、塩など、なくなったら隣に借りに行き、日々のことを話したり相談したり。いつも声をかけ合い、つながり、助け合える。生活を分かち合い、一日一日を生き抜いている。

日本で、キューバがどう変わるかと心配する声をよく聞く。私は大丈夫と思う。

革命後、幸せに生きるために、何を大切にしなければならぬのか。何をしなければならぬかを教育され、しっかりと根をはって生きている人たち、若者たち。その中で育っている子どもたちがいるから。

キューバの田舎では、月の満ち欠けをみながら生活を送る。



たとえば、下弦の月（23日目の月）の頃、バナナやいろいろな木を植えると虫がつかずよく育つと言われている。だから下弦の月の前に土地を耕し、植えつけの準備をし、苗や種を捜す。



馬や大きな豚の去勢もこの月のとき。傷からの出血が少なく、うじ虫がつきにくい。

漁も、月を見て出ていく。

自然とともに、生きている。

キューバの友好団体との懇談会

2015. 8. 12 (キューバ大使館)

終戦 70 周年の年に、5 人のキューバの英雄のひとり、フェルナンド・ゴンサレス ICAP 副総裁が、広島・長崎の「原水爆禁止世界大会」にキューバ代表として参加するため来日したのを機に、8 月 12 日、駐日キューバ大使館において懇談会が行なわれました。



「5人の英雄」のひとりー フェルナンド・ゴンサレス ICAP副総裁を迎えて

「5人の英雄」のひとりであり、17年にもわたる投獄にも屈せず戦い抜いたフェルナンド・ゴンサレスICAP副総裁との懇談会ということで、多くの参加者がつどいました。

CUBAPON は、有志とともに「アメリカに囚われている 5 人のキューバ人士の解放を求める日本 100 人委員会」の結成を呼びかけ、2006 年 10 月 5 日に結成、その事務局として活動してきました。

その「100 人委員会」の呼びかけ人の 1 人で、日本で最初にこの釈放活動を手がけた二瓶裕子さんらも顔を見せました。



フェルナンド副総裁と懇談する二瓶さん

2014 年 12 月、「5 人の英雄」全員が解放されたことを、キューバ国民、キューバと連帯する世界の仲間たちとともに改めて喜び合いたいと思います。

CUBAPON 当面するとりくみ

【米プロジェクト】

11 月 5 日～12 月 3 日

菊田氏が渡航し、青年の島で技術支援にあたる。

【2015 キューバ友好訪問団】

11 月 20 日～11 月 27 日

訪問先＝キューバ労働組合中央組織（CTC）、キューバ諸国人民友好協会（ICAP）、ニコ・ロペス党学校、青年の島など。

【2016 キューバ教育訪問団】

2016 年 2 月 13 日～2 月 21 日

訪問先＝小学校/中学校/大学教育学部（青年の島）、師範大学（ハバナ）、キューバ諸国人民友好協会（ICAP）など。

私とCUBA

CUBAPON20年

松矢文男（CUBAPON 会員／埼玉）

10 年前の今頃、退職を決め、キューバ関連書物を読み漁っていた。翌年 7 月初めてキューバ訪問。イメージしたキューバそのものであった。更にはフィデル・カストロの演説を目前で聴くことができたことにも感動した（彼は翌日入院・手術）。もっとキューバを知りたくなる。11 月クバポンの訪問団に参加。クバポンとの出会い。翌年春、3 度目の訪問、以後昨年まで 18 回キューバへ行った。東部のバラコアから西部のピナルデルリオまでの主なところは見て回ることができた。

特にクバポンとの出会いは、私にとって大きな転機となった。未だにキューバの諸々をもっと知りたいと思っているのだが、この出会いは私をキューバに関わる支援等の諸活動へと導いた。2008 年の青年の島訪問はその始まりであった。青年の島での日系人会との交流を通して、多くのことを知ることができた。中でも米づくり支援（米プロジェクト）の決定は、私をキューバへとめり込ませた。

今年でプロジェクトは完了するが、米づくりは長いプロセスが必要であり、今後は側面的に支援をしていきたい。また、日系人会が切望していた「交流連帯の家」（友好の宮殿）建設も間もなく着工する予定である。建設資金については全面的に協力したい。

アメリカとの国交は回復したが、経済封鎖をはじめ、未だ解決されていない課題は多い。いずれ「資本の欲望」がキューバにも入ってくることが予測されるが、キューバの理想である「平等」の原則を継続しつつ、持続可能な社会を築いてほしいと願っている。

第7回 キューバ連帯アジア・オセアニア地域会議

金 馬 国 晴（横浜国立大学）

私はおとし、キューバ教育研究会でキューバに行き、この2月にも訪問・調査する予定で、他方でベトナムにも、この3月とその20年前に2度訪れた。そのベトナムでキューバ友好の会議があると聞いて参加してきた。

「キューバ連帯アジア・オセアニア地域会議」は、9月8日と9日、ハノイ市内のメリアンホテルで開かれた。

参加者は総計200名以上。どんな国から来るものかが気になったが、ベトナムなど東南アジア・南アジア諸国に、東アジアからは中国、香港、日本、韓国、北朝鮮も、オセアニア諸国に、南アフリカなど、計15カ国ほどから参加があった。政府関係や革新政党から来た国や、民間からのみ参加の国もあった。日本からは、日本キューバ友好協会や民医連から数人ずつ、ピースボートのキューバ・ベネズエラ担当、その他個人で、計15名にのぼり、関心の高さが伺えた。



出版社による最新書籍が展示され、1冊あたり1ドルの寄付でもらい放題だったのだが、キューバンファイブの本が何冊もあった。ある本には、刑務所での扱われ方（定員の3倍の人数が詰め込まれていた、証拠にもならないものまで没収された）など詳しい記述がされ、アントニオの絵がたくさん載った本もあった。会場の廊下に彼のチョウチョの絵が何枚も展示されていた。彼の知性と絵画に表れるセンスが、他の囚人への教育となった、との発言もあったという。

その他、まだ真の経済封鎖は解けていないし、グァンタナモの米軍基地も残っているし、といった発言もあった。キューバの中では、今回の国交正常化により、「キューバの革命は成功だった、これで完結」との雰囲気を作り、「さあ、これから資本主義」と言わんばかりに、資本主義イデオロギーの浸透がより進められつつある、との警戒が、周知されているときいた。だからこそ、逆に社会主義市場にアメリカを取り込む、積極的な外交が必要との発言もきかれた。

今後が注目されるキューバだが、私としてはベトナムとの比較も、街に出てみて考えたことだ。



壇上で発言するアントニオ・グレロ氏



「キューバ連帯・アジア太平洋地域会議」とは

世界各国の友好組織との連帯強化を目的にICAP（キューバ諸国人民友好協会）が中心となって全世界4つの地域で「キューバ連帯地域会議」を開催している。アジア・オセアニア地域では、ほぼ隔年で開かれており、今回のハノイ会議で7回目を数える。



「夢と現実」

La realidad y el sueño

フィデル・カストロ氏は8月13日の89歳の誕生日の日、党機関紙にメッセージを寄せた。Cubadebateのサイトには2012年3月2日、氏が日本のヒバクシャといっしょに撮った写真が掲載されている。(訳者)

科学の世界に満足できる答えを求める研究者は別として、われわれ全員がとりこまれている信じ難いほどの無知を前にして、今、苦悩にあえぐ人類こそよりよく教育されなければならないとだれもが考えるならば、書くということは有益な方法である。それは数少ない文字の中に深遠な内容を含む話術である。

われわれ全員は若いころのある時点で、とくにヒロシマとナガサキに原爆が炸裂した後、つまり、これで日米の残酷な戦争が終わったのだが、アインシュタインについての話を聞いている。米国のパールハーバーの基地攻撃からあの戦争は始まったのだが、原子爆弾が投下されたとき、日本帝国はすでに敗北状態にあった。米国は国土も産業も戦争から無縁で、世界が壊滅的に破壊され、死者と負傷者、空腹な者たちで満ちていたとき地上最大の富と最良の兵器をもつ国になり始めていた。ソ連邦と中国は両国合わせて5千万人以上の人命を失い、計り知れない物的損害を被っていた。世界の金のほぼすべてが米国の金庫に納まっていた。今日、米国の準備金としての金の総量は8,133.5トンに達していると計算されている。にもかかわらず、米国はブレトン・ウッズで調印した協定を根底から反古にし、ドル紙幣の金換算を支えるトロイオンスの義務を履行しないと一方的に宣言した。

ニクソンが命令したこの方策はフランクリン・デラノ・ルーズベルト大統領が締結した協定に違反していた。この問題についての専門家の相当数によれば、このことが他のどの災難にもまして、ドルを基軸にした一国の経済モデルを強い力で襲い、脅かす危機の根源が作られたという。それゆえにキューバは数千億ドルに達した損害に等しい賠償を受け取る立場にある。これについてキューバは一貫して、反駁できない議論と事実を通じて国連の演説をもって非難してきた。

キューバの党と政府によって明々白々に表明してきたように、西半球のすべての国々ならびに人類という家族をなす諸国民総体の自発的意思と平和の証として、全宇宙空間で自らに賦与されたつつまじやかな場で人類存続の保証に寄与するため、皮膚の色、出身国を問わず、すべての人の宗教的信仰への、あるいは無宗教の完璧な権利のために、われわれはすべての人間の平和とよりよい生活のための闘いを決して放棄しないであろう。

健康、教育、仕事、食料、安全、文化、科学そしてよりよい暮らしに対するすべての市民の平等、すなわち、われわれが自らの闘争を開始したときに宣言したものと 同じ諸権利、これに加えて、この世界に暮らす住人のための正義と平等というわれわれの夢から出てくる権利、これを私はすべての人に対して願う。私はこれと同じ考え、あるいは、同じ方向性の考えだがこれをしのぐ優れた考えに全面的にあるいは部分的に共鳴する人々、親愛なる同胞に感謝を伝えたい。

フィデル・カストロ・ルス

2015年8月13日
午前1時23分

(富山栄子訳)

